

SDGsに大学全体で取り組みます!

世界的にSDGsへの取り組みが注目される中で、日本でも企業はもとより、大学におけるSDGsの活動が広がりつつあります。大学は研究・教育・社会貢献を担う高等教育機関として、SDGsの課題に対しても深く取り組むことが可能です。また、環境問題や社会課題に関心のある「SDGsネイティブ」と呼ばれる若い世代は、進路や就職先を選ぶときに大学や企業のSDGsへの取り組みを考慮することもあるそうで、若者を受け入れる大学においては活動の必要性が問われています。

地域連携本部が中心になって推進中

本学は創立以来、企業の第一線で活躍する人材の育成や研究活動を通して社会貢献に取り組んできました。2000年には、さらに一歩進めてエクステンションセンターを立ち上げ、生涯教育として公開講座を実施するなど地域貢献にも力を入れてきました。2019年からは組織的に地域の産業、文化の発展・活性化に貢献するため、地域連携本部を発足させました。

SDGsについては、この地域連携本部が中心になって推進しているところですが、大学におけるSDGs活動とは単なる社会貢献ではなく、教育・研究活動を通して社会の課題を解決することではないかと考えています。学生や教職員による研究活動の延長上でSDGsを捉えることができれば、SDGsネイティブと呼ばれている若い世代にも繋げていくことができますし、何よりもその活動を長く続けることができます。

らに、SDGsにより社会貢献活動が見える化されるようになったことで、研究の発信力や大学のブランド力のアップにも繋がるのではないかと期待しています。

今年度はSDGsの普及・啓発も兼ねて、学内の全教員に対してアンケート調査を実施しました。この調査結果に基づいて、SDGsのための研究発信をウェブサイト等で積極的に行っていきます。また、本学は豊田市と包括連携協定を結んでいます。SDGs未来都市に選定された豊田市と共に持続可能なまちづくりを推進していきます。現在、その一つとしてSDGsの達成に向けた本学の取り組みについて、シンポジウム等を計画しているところです。



地域連携本部長
曾我部 博之 教授

「SDGs(エス・ディー・ジーズ)」とは?

「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」の略称で、2015年9月の国連サミットで採決されたグローバルな目標です。17の目標(ゴール)と169のターゲットから構成されています。企業はもとより、大学での取り組みも注目されています。イギリスの高等教育専門誌が毎年発表する「THE大学インパクトランキング」では、SDGsの枠組みを使って大学の社会貢献度を可視化しています。



SDGsを活用しています!



経営学科
小林 富雄 教授

食品ロスの問題を考える研究

20年前から食品ロスの問題に取り組む小林教授。「20年前は廃棄物をどうリサイクルするかの視点しかなく、研究を進めるうちに単なる環境問題ではないという思いが強くなりました。根本的なフードビジネスの在り方を考えなければいけない」と言います。

小林教授が委員長を務めるドギーバッグ普及委員会では、食品ロスを減らすためにおしゃれなリターナブルバッグを作り、ドギーバッグの普及活動に取り組んでいます。「食べ残しによる食品ロスを減らすのはもちろんですが、企業経営の面からもプラスになると考えています」。



SDGsで活動や研究を明確に

2019年10月に施行された「食品ロス削減推進法」により、SDGsを使った取り組みも進んでいます。「今までも食

品ロスに取り組んできた企業はありますが、マーケティング的に成功しているとは言えませんでした。その点、SDGsにはスタイリッシュでわかりやすいロゴがあり、定量的にもゴールが明確になるので、企業の活動をアピールできるメリットがあります。

先生の食品ロスの研究は、目標12の「つくる責任つかう責任」のターゲット12.3「世界の一人当たりの食糧廃棄を半減させ、生産・サプライチェーンの食品ロスを減らす」の達成に繋がりますが、ハードルもあるそうです。

「モノがあふれている時代、作る責任と買う責任が問われます。これからは価値共創、地域共創で売る側と買う側の関係性を密にする必要があります」。これはSDGsの目標17の「パートナーシップで目標を達成しよう」に当たるもので、12を達成するには17の達成が必要と言います。

「この取り組みは、新しいことをやるというより、やってきたことを再定義することです。SDGsのために研究をやるというより、大学の仕組みとしてSDGsを活用した方が取り組みやすいと思います」。

大学と同窓会に貢献! 研究分野でも活躍した稲垣慎二名誉教授 (40C)

同窓会の会長代理や愛工大副学長を務めるなど、同窓生の方々にも馴染みの深い存在です。応用化学科在学時から現在に至るまでの思い出を語っていただきました。



学生時代は実験に没頭

「私が若水キャンパスに入学したときは、ちょうど4学年が揃った年でした。学科は電気工学科、電子工学科、応用化学科の3学科だけの時代です。

当時、実験を重視していたそうで、応用化学科には最新の設備が整っていたと言います。「とにかく、やってみよう!」をスローガンに、午後は毎日、実験に明け暮れていました」。

八草での教員生活

卒業後、愛工大の助手になった頃、キャンパスも若水から八草へ移転。「ずいぶん山の中だったので、びっくりしました。外にはうさが走っていたほどです」。

応用化学科の前からバスが出ていたのですが、化学実験は時間がかかることもあり、乗り遅れて学生たちと泊まり込むことも多々あったとか。講師になってからは、一般教養の化学を教える難しさを痛感されたそう。「幅広い知識が必要で、すごく勉強した記憶があります」。

有機材料化学が専門で、ゴムやプラスチックの性能や物性を高める研究を振り返り「いろいろなモノを混ぜて作る材料は、新しい発見も多々あります。産業界とも密接に関わる内容で、企業と一緒に研究を進めることも多く、特許取得に協力しました」。

また、様々な学会に役員として関わったこともあり、500人ほどが参集した最



最終講義の様子。
寄せ書きされた白衣を着て

終講義には、学会の方々も来場され、思い出深いものとなったそうです。

大学退職後も教育現場で

大学退職後に愛知工業大学情報電子専門学校へ校長として赴任。「なかなか生徒が集まらず、地元豊田の高校をまわって生徒集めをするように進めました。無事に定員を満たし、ほっとしました」。

「資格を取れ」「大学へ編入せよ」「就職は一流企業へ」をスローガンに掲げていたこともあり、愛工大へ編入した学生も増えたと言います。

同窓会の活動に尽力

助教授時代に同窓会の理事長となりました。「資金がなくて活動もままならなかった状況で、活動費の捻出を条件に引き受けたこともあり、まず会費の値上げをしました。各地域支部や職場支部の立ち上げも行いました。支部ができたことで、いろいろな情報が入ってきますし、支部を通して学生の就職や入試も働きかけていきました」。

教授になった翌年に同窓会会長代理になり、様々な組織改革や会則変更も手掛けました。「理事長という立場は事務局長とし、会長は学外の方をお願いし、会長が関わるできない場合は会長代理として活動を支えるようにしました」。教員や職員に同窓生がいることも、細やかな活動に繋がっていると感じているそうです。

大学や学友との関係が続き、心のよりどころとなる点に同窓会の存在意義があると考え、イベントや総会を開催し、大勢が集まることを目指し活動をしてきました。

「今後は在学生にとっても役に立つような同窓会になっていくといいと思っています」。



同窓会へのご功績に対して、感謝状と記念品を贈呈

略歴

昭和40年(1965) 3月	愛知工業大学応用化学科卒業	昭和63年(1988) 11月	愛知工業大学同窓会会長代理(平成6年8月まで)
昭和40年(1965) 4月	愛知工業大学助手、名古屋大学工学部研究生	平成元年(1989) 5月	社団法人日本ゴム協会理事(平成9年5月まで)
昭和41年(1966) 5月	愛知工業大学大学院工学研究科応用化学専攻入学(助手を休職)	平成2年(1990) 5月	社団法人日本ゴム協会東海支部長(平成4年5月まで)
昭和43年(1968) 4月	愛知工業大学助手に復職	平成9年(1997) 5月	社団法人日本ゴム協会副会長(平成13年5月まで)
昭和45年(1970) 4月	愛知工業大学講師	平成13年(2001) 4月	愛知工業大学副学長(平成25年3月まで)
昭和49年(1974) 4月	愛知工業大学助教授	平成14年(2002) 3月	学校法人名古屋電気学園理事(令和2年3月まで)
昭和51年(1976) 8月	愛知工業大学同窓会理事長(昭和57年11月まで)	平成25年(2013) 4月	愛知工業大学顧問(令和2年3月まで)
昭和55年(1980) 5月	工学博士(東京工業大学)	平成25年(2013) 4月	愛知工業大学情報電子専門学校校長(平成30年3月まで)
昭和57年(1982) 11月	愛知工業大学同窓会副会長(昭和63年10月まで)	平成30年(2018) 7月	愛知工業大学名誉教授
昭和62年(1987) 4月	愛知工業大学教授		

黒字：学園関係、緑字：同窓会関係、青字：学会関係